

スラムの現状に對する彼らの考え方、そして、できれば、彼らの改
革案までをも概観してみることにしたい。

トルファン・ウイグル人社會の一斷面

梅 村 坦

近年、ウイグル文書の研究は佛教關係のものを中心として、内外
で次々に成果があげられている。その一方で、十世紀以降ウイグル
人たちがトルファン盆地をはじめとする中央アジアの諸地域に築き
あげていった社會の特徴についても、斷片的ながら既にいくつかの
事實が明らかになってきており、そのいっそうの解明のためにウイ
グル俗文書はなお大きな利用價值を持っている。今回は、十三〜十
四世紀のものとなる一群のレニングラード所藏の文書を検討して
みたい。すべてなんらかの形で解讀研究が發表されているものであ
るが、それらの内容を相互にこまかく比較検討してみると、ある一
族とその周邊の人びとの生活がうかがひあがってくる。彼らはトルフ
アン盆地を支配する權力の下で地主として、奴隸主として、あるいは
商人として生活するものもあつたが、一族の中で土地の賣買をおこ
ない、またかなりの借金をして葬式をだしたり結婚式をおこなう
など、社會のしきたりどおりに生きていた。これらの事實の分析か
らトルファン社會のある程度の實態が判明するが、人びとの生活を
歴史的に位置づける方法についても考えてみたい。

陳の江總と佛教

吉 川 忠 夫

陳の江總（五一九—九四）は、浮豔の文學と酒色に耽溺し、つい
に亡國をまねいた陳の後主陳叔寶の宰相として、かんばしからざる
評判を得ている。いまそのことはしばらくおき、江總の生涯は佛教
と深い關係で結ばれている。晩年の江總が攝山棲霞寺の慧布と親し
く交わり、その因縁から「攝山棲霞寺碑」を書いた次第は、拙稿
「五、六世紀東方沿海地域と佛教——攝山棲霞寺の歴史によせて——」
（『東洋史研究』四二—三）に述べた。濟陽考城の江氏はそもそも
篤く佛教に歸依した一家であり、父の江紇は建康に慧眼寺を創建し
た。また江總は梁末に侯景の亂を避けて以後、陳の天嘉四年（五六
三）にいたるまで、吳、會稽さらに嶺南の各地を轉々とするが、會
稽で身を寄せた龍華寺は六代の祖の江夷の創建にかかる。そして舅
の蕭勃、あるいはまた歐陽頔に身を寄せた嶺南滞在中に、江總は唯
識學を傳えた眞諦となんらかの交渉をもつたものと推察される。歐
陽頔と歐陽紇の二代こそは、嶺南における眞諦のパトロンであつ
た。歐陽紇は歐陽詢の父である。

以上のような江總と佛教との關係を通じて、陳代の佛教の一端を
瞥見する。